

現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究

岡田 努

Friendship, Life-events and Development of the Self during Adolescence

Tsutomu OKADA

問題と目的

青年期は人生の他の時期と比べて危機的な時期であると多くの精神科医や青年心理学者によって述べられてきた。この時期には、反抗的態度に加え、精神的疲労性、注意散漫、集中困難が見られクレッチマー(新海訳,1958)はこれを「思春期危機」と命名した。クレッチマーは、思春期危機は、精神病や神経症などとの判別困難な事例が多い反面、多くは一過性のものであり成熟に伴って症状が消失していくとしている。そして危機的な症状は自然な成熟にとって必要な過程であり、こうした時期は、思春期的本能が改変されるために不可欠な転換の時期であるとしている。また笠原(1976)は、青年期における年代ごとでの精神疾患の違いについて次のように指摘している。すなわち、青年期前期(中学前半から高校前半ころ)の対人恐怖症や躁鬱病、青年期後期(高校後半から大学卒業頃)での自殺、アパシー、寡症状の統合失調症、プレ成人期(22, 3歳ころから30歳前後)での不安神経症、メラニコリー親和型うつ、完成された妄想型の統合失調症などである。そして対人恐怖症のような青年期に特有の病理は30歳ころには軽快することが多いことも指摘している。このように、青年期は精神的な病理が発生しやすい年代であると考えられている。

これに対して、精神病理や混乱は一般的な青年には必ずしも見られず、多くの青年は平穩にこの時期を通過していくとする立場がある(青年期平穩説)。Offer & Offer(1975)はアメリカ東部の高校生に対する3年間の縦断的研究の結果、青年全体の23%が際だった変化や困難のない連続成長群であり、葛藤や病理的防衛を持つ波乱成長群(35%)や、神経症的症状を示し葛藤の大きい激動的成長群(21%)が大半を占めることはないことを見出した。また村瀬・村瀬(1973)も、平均的青年についての各種の心理検査を施行し、大きな葛藤や変動が見られなかったとしている。

青年期平穩説は、多くの青年が精神病理的困難を示さないことで、青年期危機そのものを否定できるとしている。しかし、この場合、精神症状や混乱といった否定的ライフイベントは従属変数とみなされており、ライフイベントが自己の発達に及ぼす影響の有無につ

いては、青年期平穩説からは説明できない。また青年期危機の本来の意味は、危険性よりも crisis の語源である「分岐、峠」に近い意味であり(鏑,2002), 人生の次の段階に向かっている分岐点, ないしは, その時点での心理的決断(清水・頼藤,1976)とされている。すなわち自己を取り巻く対人環境が変化し, あらたな自己像を確立することが必要とされる青年期に, 他者との親密な関係や自己の内省が生じ, 自己意識の発達が促進されるといった過程までも青年期危機の概念は含んでいる。よって多くの一般青年が大きな混乱なく青年期を通過するとしても, こうした対人関係や自己の変容過程そのものが否定されることにはならない。よって, 精神的混乱などのライフイベントが対人関係や自己の発達にいかにかに寄与するのかについての詳細な検討が必要と考えられる。

一方, 青年の対人関係と自己の発達の関連については, 次のように考えられている。青年期は, 人格的共鳴や同一視をもたらすような深い友人関係を持つことや, 自分自身に対する関心(内省)が高まることによって, 新たな自己概念が獲得され, その結果, 健康な成熟が促進されると考えられてきた(西平,1973;1990;岡田,1999b など)。松井(1990)は青年期の友人関係が社会化に果たす役割として, 1) 緊張や不安, 孤独などの否定的感情を緩和・解消する存在としての「安定化機能」, 2) 対人関係場面での適切な行動を学習する機会となる「社会的スキルの学習機能」に加えて, 3) 友人が自分の行動や自己認知のモデルとなる「モデル機能」を挙げている。岡田(1987)は, 中学生段階での同性同年代の友人像と理想自己像の間での同一化の過程の後に, 高校生以降において理想自己と現実自己の比較によって自尊感情が規定されるようになることを見出し, 友人関係におけるモデル機能が自尊感情の発達に関わることを示した。

また自己の発達に関しては次のように考えることができる。自分自身に意識が向きやすい性格特性(自己意識特性)は, 他者の目に映る自分自身に注意が向きやすい傾向(公的自己意識)と, 自身の内面に注意の向きやすい傾向(私的自己意識)に分けることができる(Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)。柏木(1983)は, 他者から自分がどのように認識されるかを客観的に把握する側面である公的自己は, 感情・好みなど直接的な内的体験の認識である私的自己よりも, 自己把握が困難であるとしている。また他者把握においても, 表出された観察可能な行動を認識することの他に, 直接には観察不可能な他者の内的過程を推測する過程があり, 後者の方がより困難であるとしている。そして「他者が自分をどう認識するか」についての把握は, 自己把握であると同時に, 他者の内的過程(他者自身の認識)への推論でもあり, これは, 他者の感情に対する共感性, 他者の立場に立って物事を理解する能力(脱中心化)が前提となる。このように他者の視点取得を前提とする公的自己が形成されてのち, はじめて「理想自己」が形成され, 現実自己との照応が可能となる(柏木,1983)。すなわち青年期までの自己の発達は, 同性同年代の友人関係との同一化に基づいた理想自己像の形成と, 他者の視点から見た公的自己(現実自己像)を確立し, 両

者を照合した自己への評価感情（自尊感情）を持つことが出来るようになる過程であると言えることができる。なお、Duval & Wicklund (1972) は自己覚醒が高まった状態においては自己に対する評価が低下することを指摘している。自己意識特性が高い者は、日常的に自分自身に対する関心が高く自己覚醒が高い状態におかれやすい。そのため自己の適切さへの基準が強く意識され、自尊感情も低下しやすい（岡田,1993）。よって自己意識が高い者ほど、低い自尊感情を持つと考えられる。

一方、現代の青年の友人関係の特徴として、互いが傷つくことを避けるため、内面的な話題を避け、明るく群れる傾向が1980年代後半ころから次第に指摘されるようになってきた（東京都生活文化局,1985;千石,1991;栗原,1996;大平,1995など）。岡田(1995, 1999a, 2002a, 2002b)は、こうした傾向が、必ずしも同一の青年に見られる訳ではなく、それぞれの特徴がより顕著に見られる青年群に分かれることを見出してきた。また岡田(1999a)は、青年自身がそうした関わりを理想としている訳ではなく、周りの友人が取っている対人関係のあり方だと認知していることを見出した。しかし、これらの研究で用いられた尺度は、友人関係のとり方についての青年の態度や動機を含む内容であり、そうした態度や動機が具体的な個々の行動をどこまで反映したものであるかについては明らかとなっていない。さらに、先に述べたように、青年期における友人関係の深まりが自己の発達を促すならば、現代的な希薄な友人関係を取る青年は、個々の行動においても内面を開示しあうような行動が見られず、その結果、自己の発達についても負の影響を受けていると考えることができる。よって本研究では、以下の二点を目的とした調査研究を行う。

- 1) 友人関係の態度・意識と行動の関係を探索的に検討するため、行動に関するリストを作成し、その構造を検討する。
- 2) ライフイベント、友人関係における態度・意識、行動が自己意識の発達に影響するモデルを構成し、その過程を推定する。

予備調査

青年の友人関係における具体的な行動を把握・分類するための予備調査を行う。

調査対象 高校生：金沢大学オープンキャンパス時に見学に訪れた石川県内の高校生のうち承諾が得られた1～3学年生徒49名（男子10名，女子39名）（2001年8月実施）

大学生：金沢大学の3，4年学生31名（男子13名，女子18名）講義時間および個別に配布（2001年8月～12月実施）

調査項目 榎本(1999)における「活動的側面」、遠矢(1996)、総務庁青少年対策本部(1999)などをもとに、青年の交友関係の行動に関する38項目を作成し、「最も親しく付き合っていると認める同性の友だちを一人」（親友）および「日常付き合う友だち『グループ』」について、各項目の中で、ふだんの付き合いとして、あてはまるもの（複数回答可）に○をつ

けるよう教示した。また呈示された項目以外に、「その人(たち)とどのような付き合いをしますか? 思いっただけ記入してください」の教示によって、自由記述による友人関係での行動の記述を求めた。

結果

Table 1 に各項目での選択数を示す。選択頻度が親友、グループのいずれかにおいて2以下であった「交換日記をする」「一緒に習い事に行く」は本調査項目からは除外された。また自由記述回答について、類似内容のものを取りまとめ30項目に集約した(Table 2)。これらを合わせた66項目を友人との行動内容(以下「友人行動」と表記する)項目とし本調査に用いることとした。

Table 1 友人行動の選択頻度(予備調査)

	親友		グループ	
	度数	%	度数	%
1. これからの生き方についての話をする	57	71.3	27	33.8
2. 人生観についての話をする	43	53.8	20	25.0
3. 自分の性格についての話をする	58	72.5	35	43.8
4. 将来についての話をする	65	81.3	39	48.8
5. お互いの欠点の話をする	37	46.3	15	18.8
6. お互いの長所の話をする	46	57.5	23	28.8
7. 意見が違うときに納得するまで話し合う	23	28.8	12	15.0
8. 喜びを分かち合う	62	77.5	50	62.5
9. 悲しみを分かち合う	44	55.0	32	40.0
10. 自分の趣味についての話をする	61	76.3	46	57.5
11. お互いに不満に思っている点を言い合う	27	33.8	13	16.3
12. トイレに一緒に行く	20	25.0	27	33.8
13. 教室を移動するときには一緒に行く	40	50.0	45	56.3
14. 交換日記をする	2	2.5	2	2.5
15. 自分の悩みを手紙に書いて交換する	15	18.8	4	5.0
16. 日頃の出来事を手紙に書いて交換する	13	16.3	6	7.5
17. 一緒に登下校する	27	33.8	16	20.0
18. 一緒に勉強する	23	28.8	21	26.3
19. テレビ番組の話をする	54	67.5	51	63.8
20. 好きなタレントの話をする	44	55.0	47	58.8
21. 一緒に習い事に行く	4	5.0	1	1.3
22. 部屋の中でゲームをする	13	16.3	9	11.3
23. お互いの家で一緒に遊ぶ	34	42.5	23	28.8
24. 何となく家に集まって時を過ごす	29	36.3	19	23.8
25. 休日に出掛ける	46	57.5	29	36.3
26. 自転車に乗ってブラブラする	11	13.8	8	10.0
27. 一緒にゲームセンターに行く	8	10.0	6	7.5
28. 外で遊ぶ	28	35.0	22	27.5
29. 一緒にスポーツをする	22	27.5	18	22.5
30. カラオケに行く	37	46.3	40	50.0
31. メールでメッセージを送り合う	56	70.0	47	58.8
32. 特に用事もないのに電話で長く話をする	21	26.3	3	3.8
33. お昼を一緒に食べる	50	62.5	52	65.0

34. 相手が怒っているときに、なだめる	42	52.5	32	40.0
35. 失敗したときに、すぐに謝る	43	53.8	41	51.3
36. 親に言えないようなことを相談する	52	65.0	21	26.3
37. 恋愛についての相談をする	56	70.0	32	40.0
38. 困っているとき相談に乗る	66	82.5	52	65.0

Table 2 自由記述回答に基づいて作成された項目

学校での出来事の話をする, 学校での行事の話をする, 授業の話をする, 先生についての話をする, 休み時間に一緒にいる, 一緒にボーっとする, 一緒に部活やサークル活動をする, 一緒にプリクラを撮る, プリクラの交換をする, 一緒に旅行する, 一緒に酒を飲みに行く, 一緒にお茶をしに行く, 一緒に食事をしに行く, 一緒に合コンに行く, 一緒に買い物に行く, アルバイトを紹介しあう, 一緒にアルバイトをする, 互いの家に泊まる, 自分の言いたいことをはっきりと言う, ノートを貸し借りする, とりとめのない話をする, 試験や授業の情報交換をする, スポーツの話をする, 携帯電話の番号を教え合う, メールアドレスを教えあう, 電話をかけあう, 無理に相手を理解しようとしなない, 送り迎えをし合う, 互いの勉強の邪魔をする, ふざけあう

本調査

方法

以下の尺度項目を用いた質問紙調査を行った。

尺度項目

1) 友人行動: 予備調査において作成された項目を加えた66項目について、「最も親しく付き合っていると思う同性の友だち1名とのつきあい方」(親友評定), および「日常付き合う友だちグループとのつきあい方」(グループ評定)について、あてはまるものにマークをするよう求めた。

2) 友人関係に対する態度: 岡田(1999b)で作成された現代青年に特有な友人関係に関する尺度(以下「友人関係尺度」と記す)。自分自身がどのような友人関係の取り方をするかについての質問項目から成る。内面的な関係を避け、互いの内面に踏み込まないような関わり方を示す「自己閉鎖」、友人から自分が否定的に評価されないよう気をつかう関わり方を示す「自己防衛」、友人を不快にさせないよう気をつかう関わり方を示す「友だちへのやさしさ」、楽しく円滑な関係を取る「群れ」の下位尺度から成る計41項目。ただし岡田(1999b)では「群れ」下位尺度に相当する項目は下位尺度内での因子負荷量の差が極端に大きく、実質的に上位2項目で因子の性質が規定されている可能性があるため(上位2項目が.80以上, それ以外の3項目が.38~.49), 本研究では再度項目を追加し, 再検討を行った。「まったく当てはまらない」(1)~「とてもあてはまる」(6)までの6段階評定で, 各項目について該当する段階1カ所に○をつけるよう求めた。

3) 自己意識: Feningstein, Scheier, & Buss(1975)を菅原(1984)が邦訳した自己意識尺度21項目。2)と同様の6段階評定とした。

4) 自尊感情: Rosenberg(1965)に基づき山本・松井・山成(1982)が邦訳翻案した個人の全

体的な自尊感情の水準を測る尺度 10 項目。2) と同様の 6 段階評定とした。

5) ライフイベント: 榎本(1999)が作成したライフイベントに関する尺度。肯定・否定それぞれについて、対人、達成、両関連、無関連の各領域に分かれる。本研究では、これらのうち、「恋人がほしいのにできない」など、過去に経験した事柄ではなく現状に対する記述や意味が不明確な項目を除いた 114 項目を用いた。回答は最近 3 ヶ月の経験に関して、該当するライフイベントにマークするよう求めた。

回答協力者：関東地方の複数の 4 年制大学および金沢大学の大学生（各学部）

年齢 18 歳～23 歳

有効回答数 188 名（男子 68 名，女子 120 名）

実施時期 2003 年 1 月 心理学関係授業にて一斉施行

結果と考察

1 項目の分析

1) 友人行動：親友評定，グループ評定それぞれについて，無回答項目を 1，回答のあった項目を 2 とコード化し，名義尺度に基づくカテゴリカル主成分分析による項目の分類を行った。

親友評定については，固有値の減少から 4 主成分を抽出した。得られた主成分負荷量について PROMAX 回転を行い，5 以上の負荷量をもつ項目について解釈を行った (Table 3)。その結果，第 1 因子は「人生観についての話をする」「これからの生き方についての話をする」など内面的な自己開示をする項目から成り「開示」因子とした。第 2 因子は「ノートを貸し借りする」「教室を移動するとき是一緒に行く」など学校生活の項目から成るため「学校生活」因子と命名した。第 3 因子は「部屋の中でゲームをする」「一緒にスポーツをする」「お互いの家で一緒に遊ぶ」など学外・特に互いの家で一緒に行動する内容の項目から成り「家での生活」因子と命名した。第 4 因子は「携帯電話の番号を教え合う」「メールアドレスを教えあう」など携帯電話やメールを通じた関係の項目から成り「携帯・メール」因子と命名した (Table 3)。

友人グループ評定については，固有値の減少から 3 主成分を抽出した。親友評定と同様に PROMAX 回転を行い，4 以上の項目を各因子を代表する項目として解釈した。その結果，第 1 因子は「これからの生き方についての話をする」「人生観についての話をする」など内面的な開示をして互いに語り合う内容の項目から成り「開示」と命名された。第 2 因子は，「互いの家に泊まる」「一緒にゲームセンターに行く」など学外で一緒に遊ぶ内容の項目から成り「一緒に遊ぶ」，第 3 因子は「休み時間に一緒にいる」「教室を移動するとき是一緒に行く」など学校生活に関連した項目から成り「学校生活」と命名された (Table 4)。

2) 友人関係に対する態度：重みなし最小2乗法による因子分析を行い、PROMAX回転を行った。40以上の項目について解釈した結果、第1因子は、「本当の気持ちは話さない」「自分の心をうち明けて話す(逆転項目)」など自分の内面を開示しない傾向を表す項目に負荷量が高く「自己閉鎖」と命名された。第2因子は、「ウケるようなことをする」「冗談を言って相手を笑わせる」など、楽しく円滑な関係を示す項目への負荷量が高く、「軽躁的關係」と命名された。第3因子は、「相手に自分の意見を押しつけないよう気をつける」「友だちの内面に土足で踏み込まないようにする」など、友人の内面に侵入することを避ける傾向を示す項目への負荷量が高く「侵入回避」と命名された。第4因子は「友だちから傷つけられないようにふるまう」「友だちからバカにされないように気をつける」など友人から否定的評価をされ心理的に傷つくことを避ける傾向を示す項目に対する負荷量が高く「傷つけられ回避」と命名された (Table 5)。各因子に負荷量の高い項目から下位尺度を構成し、合成得点についてのCronbachの α 係数を求めた。その結果「自己閉鎖」が.84、「軽躁的關係」が.83、「侵入回避」が.72、「傷つけられ回避」が.71となり一応の信頼性が得られた。

3) 自己意識尺度について、各下位尺度ごとにCronbachの α 係数を求めた。その結果「公的自己意識」で.88、私的自己意識が.86で十分な内的一貫性が認められた。

4) 自尊感情尺度：尺度の一次元性を確認するため主成分分析を行ったところ、「敗北者だと思ふことがよくある」以外の項目はすべて第1主成分に.60以上の高い負荷量をもつため、以後の分析においては、本項目を除いた合成得点をもって自尊感情得点とする (Table 6)。

※1

5) ライフイベント：個々のライフイベントを経験するかどうかは、各人が置かれた状況に左右される面が大きく、ある項目で示されるライフイベントを経験したとしても、内容的に同一カテゴリの別のライフイベントを経験しやすいとは言えない。よって項目間での出現頻度の類似性に基づいて項目を分類・集約する方法には意味がないことになる。よって今回は、榎本が内容分析から想定したカテゴリごとでの反応数を合計し、それを各領域ごとでの経験頻度とした。

Table 3 友人行動 親友評定でのパターン行列

項目\因子	1開示	2学校生活	3家での生活	4携帯・メール
7 人生観についての話をする	.707	-.149	-.041	-.188
1 これからの生き方についての話をする	.703	-.153	-.183	-.094
21 お互いの長所の話をする	.660	.020	.125	-.042
11 将来についての話をする	.646	-.109	-.072	-.048
5 自分の性格についての話をする	.574	-.077	.036	.039
3 親に言えないようなことを相談する	.561	-.105	-.126	.152
52 意見が違うときに納得するまで話し合う	.551	.092	.216	-.268
17 お互いの欠点の話をする	.548	.073	.178	-.376
51 困っているとき相談に乗る	.509	.027	-.114	.174
57 悲しみを分かち合う	.487	-.008	-.007	.256
65 相手が怒っているときに、なだめる	.483	.243	-.052	.002
16 喜びを分かち合う	.440	.031	-.049	.215
27 自分の言いたいことをはっきりと言う	.439	-.067	.231	-.093
50 恋愛についての相談をする	.437	-.033	-.025	.327
53 一緒にお茶をしに行く	.431	.018	-.080	.388
43 自分の悩みを手紙に書いて交換する	.423	-.012	-.104	.048
41 一緒に旅行する	.413	.036	.053	.153
66 失敗したときに、すぐに謝る	.400	.150	-.060	.131
23 とりとめのない話をする	.392	-.054	-.216	.193
25 電話をかけあう	.386	.060	.257	.134
58 日頃の出来事を手紙に書いて交換する	.324	.117	-.034	-.119
44 特に用事も無いのに電話で長く話をする	.260	-.034	.028	.054
6 一緒にボーっとする	.249	.144	.033	-.015
13 自分の趣味についての話をする	.233	.114	.175	.049
31 ノートを貸し借りする	-.095	.728	-.097	.034
38 教室を移動するときは一緒に行く	-.100	.669	.003	.077
2 休み時間に一緒にいる	-.144	.663	.089	.002
12 試験や授業の情報交換をする	-.098	.637	-.129	.029
35 一緒に勉強する	.218	.601	-.022	-.114
15 授業の話をする	.033	.596	-.003	.134
34 トイレに一緒に行く	-.109	.589	.023	-.085
64 お昼を一緒に食べる	.087	.572	-.101	.125
9 学校での行事の話をする	.095	.520	-.142	.141
18 先生についての話をする	.097	.518	-.087	.139
46 一緒に登下校する	.043	.478	.167	-.013
24 アルバイトを紹介しあう	.128	.306	.300	.032
61 部屋の中でゲームをする	-.268	.002	.672	-.096
62 一緒にスポーツをする	-.056	.010	.656	.034
49 お互いの家で一緒に遊ぶ	-.007	-.268	.609	.043
55 何となく家に集まって時を過ごす	-.122	-.188	.607	.085
60 互いの家に泊まる	.126	-.317	.578	.076
59 一緒にゲームセンターに行く	-.169	.111	.472	.094
29 スポーツの話をする	-.063	.143	.455	.057
26 一緒にアルバイトをする	.028	.316	.445	-.163
10 ふざけあう	.118	-.042	.421	.165
30 送り迎えをし合う	.013	-.117	.377	.136
14 一緒にお酒を飲みに行く	-.030	-.168	.376	.356
45 自転車に乗ってブラブラする	.025	.062	.375	-.067
28 カラオケに行く	.039	.109	.339	.226
48 一緒に部活やサークル活動をする	-.003	.182	.309	-.025
20 一緒に合コンに行く	.027	.107	.305	.168
36 一緒に食事をしに行く	.176	.041	.247	.131
37 無理に相手を理解しようとしな	.145	.101	-.161	-.006
33 携帯電話の番号を教えあう	-.251	.028	.117	.644
19 メールアドレスを教えあう	-.114	.069	.067	.545
63 メールを送り合う	.092	.064	-.019	.536
32 一緒に買い物に行く	.048	-.028	.253	.496
47 学校での出来事の話をする	.124	.151	-.109	.477
22 プリクラの交換をする	.186	.046	-.033	.454
8 一緒にプリクラを撮る	.246	-.017	.026	.438
40 テレビ番組の話をする	-.154	.208	.254	.417
39 お互いに不満に思っている点を言い合う	.321	.102	.332	-.409
56 一緒に外で遊ぶ	.100	-.018	.310	.371
42 好きなタレントの話をする	.101	.190	.153	.364
54 休日に出掛ける	.155	-.090	.284	.320
4 互いの勉強の邪魔をする	-.065	.230	.184	-.240

Table 4 友人行動 グループ評定でのパターン行列

項目\因子	1 開示	2 一緒に遊ぶ	3 学校生活
1 これからの生き方についての話をする	.783	-.165	-.103
7 人生観についての話をする	.717	-.133	-.110
21 お互いの長所の話をする	.715	.026	-.042
65 相手が怒っているときに、なだめる	.668	-.067	.009
27 自分の言いたいことをはっきりと言う	.653	-.017	-.198
11 将来についての話をする	.638	-.201	.006
5 自分の性格についての話をする	.603	-.008	-.010
66 失敗したときに、すぐに謝る	.591	-.058	.082
3 親に言えないようなことを相談する	.575	.037	-.067
51 困っているとき相談に乗る	.526	.035	.064
13 自分の趣味についての話をする	.519	-.084	.081
57 悲しみを分かち合う	.487	.064	.220
16 喜びを分かち合う	.484	.130	.171
50 恋愛についての相談をする	.465	.037	.237
17 お互いの欠点の話をする	.432	.086	-.122
52 意見が違うときに納得するまで話し合う	.365	.227	-.107
39 お互いに不満に思っている点を言い合う	.341	.107	-.004
23 とりとめのない話をする	.320	-.181	.204
6 一緒にボーっとする	.267	.069	.250
44 特に用事もないのに電話で長く話をする	.198	.078	-.011
37 無理に相手を理解しようとしな	.148	-.074	.099
60 互いの家に泊まる	-.044	.766	-.109
61 部屋の中でゲームをする	-.247	.747	-.007
49 お互いの家で一緒に遊ぶ	-.007	.706	-.163
62 一緒にスポーツをする	.096	.641	-.167
59 一緒にゲームセンターに行く	-.145	.631	.063
55 何となく家に集まって時を過ごす	.024	.628	-.171
48 一緒に部活やサークル活動をする	-.035	.574	-.125
30 送り迎えをし合う	-.038	.543	-.140
56 一緒に外で遊ぶ	.049	.527	.186
54 休日に出掛ける	.300	.496	.006
29 スポーツの話をする	.003	.493	.077
28 カラオケに行く	-.147	.487	.280
14 一緒にお酒を飲みに行く	.058	.487	.055
26 一緒にアルバイトをする	-.077	.454	-.089
10 ふざけあう	.099	.410	.086
45 自転車に乗ってブラブラする	-.076	.395	-.128
24 アルバイトを紹介しあう	-.027	.387	.157
25 電話をかけあう	.095	.344	.221
36 一緒に食事をしに行く	.132	.267	.168
4 互いの勉強の邪魔をする	.068	.253	.127
46 一緒に登下校する	.136	.247	.236
58 日頃の出来事を手紙に書いて交換する	.005	.095	-.020
2 休み時間に一緒にいる	-.265	-.263	.773
38 教室を移動するときは一緒に行く	-.200	-.176	.730
31 ノートを貸し借りする	-.168	-.132	.675
18 先生についての話をする	.037	-.179	.637
64 お昼を一緒に食べる	-.063	-.129	.616
47 学校での出来事の話をする	.006	-.039	.583
42 好きなタレントの話をする	-.093	.218	.517
12 試験や授業の情報交換をする	.136	-.238	.487
34 トイレと一緒にに行く	.063	.001	.457
33 携帯電話の番号を教え合う	-.103	.118	.455
40 テレビ番組の話をする	-.108	.349	.454
35 一緒に勉強する	.123	-.023	.449
15 授業の話をする	.158	-.163	.444
22 プリクラの交換をする	.063	.067	.438
63 メールを送り合う	.058	.084	.436
19 メールアドレスを教えあう	.063	.045	.413
8 一緒にプリクラを撮る	.088	.142	.377
32 一緒に買い物に行く	.166	.294	.370
53 一緒にお茶をしに行く	.325	.170	.332
20 一緒に合コンに行く	-.023	.204	.304
9 学校での行事の話をする	.155	.008	.295
41 一緒に旅行する	.187	.155	.256

Table 5 友人関係尺度の因子分析 PROMAX 回転後のパターン行列

項目\因子	1 自己閉鎖	2 軽躁的 関係	3 侵入回避	4 傷つけら れ回避	共通性
9 本当の気持ちは話さない	.710	.094	.093	.130	.528
1 自分の心をうち明けて話す	-.676	-.031	-.006	.061	.444
5 悩みごとを相談する	-.671	.041	-.093	.171	.504
15 落ち込んだとき話を聞いてもらう	-.623	.047	-.081	.276	.480
17 あたりさわりのない会話ですませる	.588	.134	-.034	.271	.401
23 浅い付き合いにとどめる	.563	-.101	-.023	.173	.393
35 自分の内面に踏み込まれないように気をつける	.547	.089	.314	.054	.433
34 友だちの心の支えになろうとする	-.537	.095	.296	.004	.397
25 まじめな話題を避ける	.487	.049	-.214	.317	.324
37 まじめな話題になると冗談でごまかす	.434	.178	-.045	.036	.167
30 自分が落ち込んだ姿を友だちに見せない	.372	.026	.282	-.029	.230
8 ウケるようなことをする	.238	.815	-.097	-.037	.561
4 冗談を言って相手を笑わせる	.055	.777	-.044	-.130	.550
39 おもしろい話をする	.080	.770	-.034	.003	.551
16 友だちの前で はしゃぐ	.025	.727	-.123	-.070	.495
41 友だちと一緒に騒ぐ	-.053	.620	-.021	-.148	.395
11 楽しい雰囲気になるようふるまう	-.021	.533	.158	.010	.345
32 必要に応じて友だちを頼りにする	-.037	.276	.000	.108	.107
7 相手に自分の意見を押しつけないよう気をつける	-.003	-.049	.611	-.072	.347
27 友だちの内面に土足で踏み込まないようにする	.042	.040	.574	-.002	.343
12 お互いのプライバシーに立入らない	.291	-.025	.556	-.054	.412
22 相手の気持ちに気をつかう	-.100	.176	.544	-.033	.355
38 相手に甘えすぎない	.178	.020	.543	-.314	.338
14 友だちに心配かけないように気をつける	-.015	-.061	.530	.246	.404
26 お互いの約束をやぶらない	-.197	-.091	.522	-.171	.258
42 相手の世界に口出ししない	.112	-.154	.448	-.042	.230
18 友だちから無神経な人間と扱われないよう気をつける	-.129	.189	.361	.317	.398
29 相手にやさしくするよう心がける	-.235	.203	.361	.038	.276
28 友だちをがっかりさせないように気をつける	-.080	-.004	.362	.390	.362
3 友だちを傷つけないようにする	-.101	.103	.339	.248	.265
20 相手の言うことに口をはさまない	.083	-.140	.322	-.007	.129
33 しらけた雰囲気にならないようにする	.036	.300	.315	.114	.262
21 友だちにグチを言わないようにする	.164	-.164	.302	.121	.188
24 友だちから傷つけられないようにふるまう	.169	-.031	-.070	.591	.362
10 友だちからバカにされないように気をつける	.204	-.124	.026	.590	.413
13 仲間の前で恥をかかないように気をつける	.157	-.169	.005	.575	.373
6 友だちから「つまらない」と扱われないよう気をつける	.036	.211	-.067	.560	.379
2 友だちからどう見られているか気にする	-.166	.006	-.143	.484	.241
36 友だちに 人前で恥をかかせないように気をつける	-.091	-.110	.212	.382	.222
19 友だちと同じ持ち物を持つ	-.033	-.045	-.091	.363	.117
40 友だちと意見が対立しないよう気をつける	.136	-.095	.030	.349	.156
31 相手の気持ちを聞き出そうとする	-.256	.167	-.104	.314	.226
説明された分散合計(%)	12.27	11.06	5.58	5.29	

因子相関行列

因子	2	3	4
1	-.338	.099	.040
2		.152	.193
3			.293

Table 6 自尊感情尺度の主成分負荷量

項目\主成分	1	2	共通性
1 自分に自信がある	.776	.209	.646
2 少なくとも人並みには価値のある人間である	.784	.291	.700
3 いろいろな良い素質をもっている	.774	.282	.679
4 敗北者だと思ふことがよくある	-.322	.857	.838
5 物事を人並みにはうまくやれる	.658	.191	.469
6 自分には自慢できるところがあまりない	-.734	.016	.540
7 自分に対して肯定的である	.766	.066	.591
8 だいたいにおいて自分に満足している	.775	.029	.601
9 自分が全くだめな人間だと思ふことがよくある	-.703	.491	.736
10 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ	-.771	.226	.645
説明された分散(%)	51.68	12.76	

2 友人関係尺度と行動尺度の相関

友人行動尺度と友人関係尺度の相関を Table 7 に示す。ここに見られるように、友人関係尺度の「自己閉鎖」下位尺度と親友行動の「開示」及びグループ行動での「開示」の間で負の相関関係が見られ、内面的関係については、実際の行動との対応が見られると考えられる。ただし両者の間では内容的に類似した項目も含まれているため、十分な評価は困難である。また他の下位項目に関しては、相関関係はほとんど見られなかった。このことは、友人関係尺度の下位尺度に見られるような関係の性質は、必ずしも個々の行動と一対一に対応していないことを示している。すなわち、同じ行動を取っても、その関係についての青年自身の解釈は個人間では一貫しておらず、内面的な内容についての自己開示を除いては、個々の行動からは友人関係に対する態度や動機を推測することが困難であると言えるだろう。

Table 7 友人関係尺度と友人行動の相関(Spearman の順位相関係数)

	友人行動 (親友評定)			
	開示	学校生活	家での生活	携帯・メール
自己閉鎖 (N=183)	-.337**	-.083	.007	-.037
軽躁的關係 (N=183)	.224**	.055	.129	.024
侵入回避 (N=183)	.084	.034	-.078	.141
傷つけられ回避 (N=187)	-.170	.052	-.054	-.083

	友人行動 (グループ評定)		
	開示	一緒に遊ぶ	学校生活
自己閉鎖 (N=183)	-.437**	-.176*	-.116
軽躁的關係 (N=183)	.230**	.199**	.181*
侵入回避 (N=183)	-.141	-.076	-.037
傷つけられ回避 (N=187)	.056	-.045	.006

** : p < .01, * : p < .05

3 自己意識・自尊感情との関係

友人関係尺度、友人行動およびライフイベントと自己意識、自尊感情と相互の相関係数を求めた。(Table 8,9,10)。ここに見られるように否定的ライフイベントとの間には.30以上の相関が見られるものはなく、否定的イベント(危機体験)は友人関係にも自己の発達にも大きな関わりが見られないことが明らかとなった。

Table 8 友人関係と自尊感情・自己意識の相関

	自尊感情	公的自己意識	私的自己意識
友人関係尺度 ピアソンの積率相関係数			
	n=182	n=184	n=184
自己閉鎖	-.146*	-.114	-.138
軽躁的關係	.197**	.271**	.051
侵入回避	.059	-.010	.210**
傷つけられ回避	-.175*	.539**	-.035
友人行動(親友評定) Spearman の順位相関係数			
	n=185	n=187	n=187
開示	.207**	.067	.363**
学校	-.034	.097	.006
家	.047	-.087	.014
携帯・メール	.059	.008	-.016
友人行動(グループ評定) Spearman の順位相関係数			
	n=185	n=187	n=187
開示	.141	.065	.066
一緒に遊ぶ	.125	-.098	-.067
学校生活	-.010	.086	-.072

** : $p < .01$, * : $p < .05$

Table 9 ライフイベントと自尊感情・自己意識の間の Spearman の順位相関係数

	自尊感情 n=186	公的自己意識 n=188	私的自己意識 n=188
否定的イベント			
対人	.023	.165*	.219**
達成	-.243**	.096	.094
両関連	-.186*	.256**	.103
無関連	-.085	.108	.050
肯定的イベント			
対人	.301**	.042	.201**
達成	.312**	-.066	.152*
両関連	.271**	-.014	.205**
無関連	.112	.014	.020

** : $p < .01$, * : $p < .05$

Table 10 ライフイベントと友人関係尺度・友人行動の相関(Spearman の順位相関係数)

イベント\友人関係	自己閉鎖 n=184	軽躁的關係 n=184	侵入回避 n=184	傷つけられ回避 n=188
否定的イベント				
対人	-.119	.138	.047	.090
達成	-.013	.001	-.075	.117
両関連	-.031	.104	.046	.168*
無関連	-.024	.161*	.042	.022
肯定的イベント				
対人	-.293**	.235**	.086	-.085
達成	-.173*	.108	.075	-.138
両関連	-.249**	.166*	.101	-.117
無関連	-.080	.149*	.105	-.060
イベント\友人行動 (親友評定) n=187				
	開示	学校生活	家での生活	携帯・メール
否定的イベント				
対人	.218**	-.010	.115	.047
達成	.049	-.020	-.026	-.078
両関連	.087	.094	.077	.105
無関連	.050	.098	.142	.080
肯定的イベント				
対人	.372**	.060	.060	.222**
達成	.309**	.089	-.015	.129
両関連	.301**	.014	-.023	.107
無関連	.149*	-.006	.241**	.275**
イベント\友人行動 (グループ評定) n=187				
	開示	一緒に遊ぶ	学校生活	
否定的イベント				
対人	.202**	.073	.146*	
達成	.077	.000	.158*	
両関連	.112	.074	.199**	
無関連	.140	.120	.242**	
肯定的イベント				
対人	.340**	.226**	.253**	
達成	.377**	.172*	.231**	
両関連	.271**	.083	.095	
無関連	.206**	.183*	.161*	

**: $p < .01$, *: $p < .05$

次にこの相関関係を参考に (1) 友人関係に対する態度→自己意識→自尊感情 (2) 友人行動 (親友評定) →自己意識→自尊感情 (3) 友人行動 (グループ評定) →自己意識→自尊感情 (4) 否定的ライフイベント→自己意識→自尊感情 (5) 肯定的ライフイベント→自己意識→自尊感情についてのモデルを構成し最尤法による共分散構造分析を行った。(各潜在変数に対応する観測変数には、下位尺度の合成得点ないしは、頻度の合計を用いた。観測変数の誤差分散には、友人行動では0を、他の評定尺度式の尺度については、 $(1 - \alpha) \times (\text{下位尺度の分散})$ の値を固定した。) その結果 (1) 友人関係に対する態度との関係においては、Figure 1 に示されるモデルにおいて RMSEA=.75(PCLOSE=.19)で、ほぼ適切なモデルを示す適合度が得られた。^{註2}

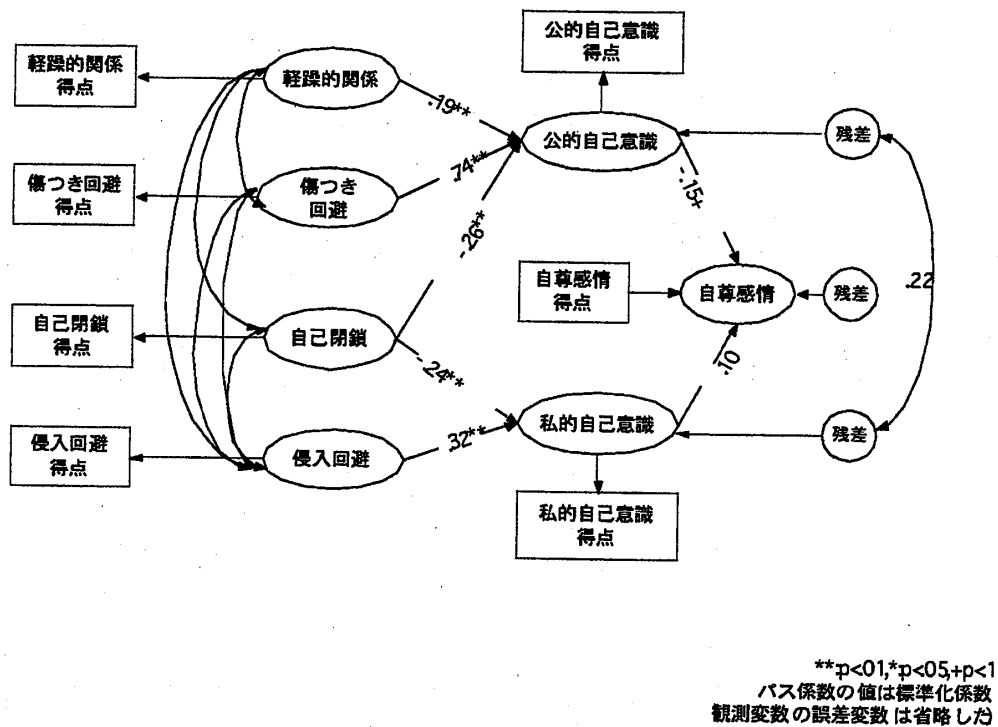


Figure 1 友人関係への態度から自己意識・自尊感情の間のパス図

(2) 友人行動（親友評定）との関係については Figure 2 に示されるモデルにおいて RMSEA=.57(PCLOSE=.37)のとほぼ適切な適合度が得られた。

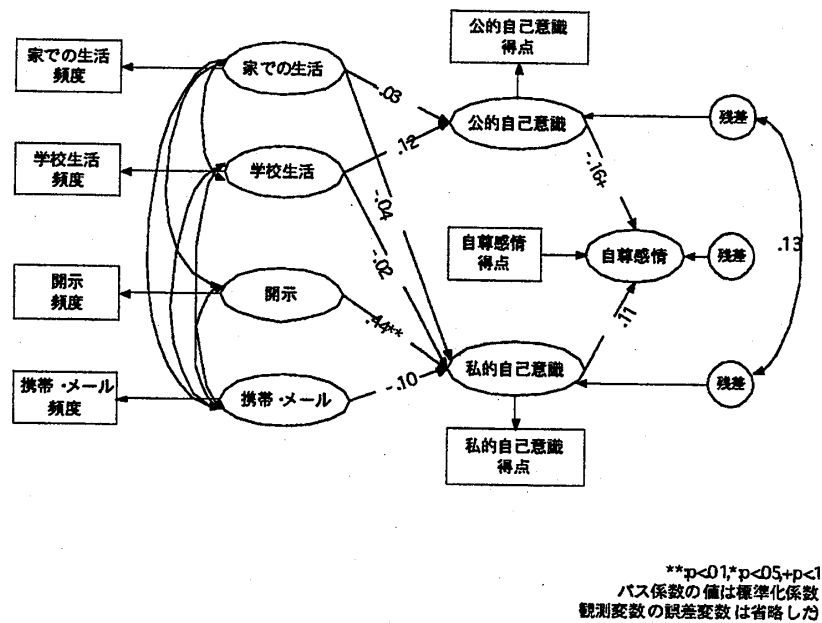


Figure 2 親友行動から自己意識・自尊感情の間のパス図

(3) 友人行動 (グループ評定) については Figure 3 に示されるようなモデルにおいて RMSEA=.04(PCLOSE=.47)で十分な適合度が得られたが、自己意識への顕著な影響関係は見られなかった。

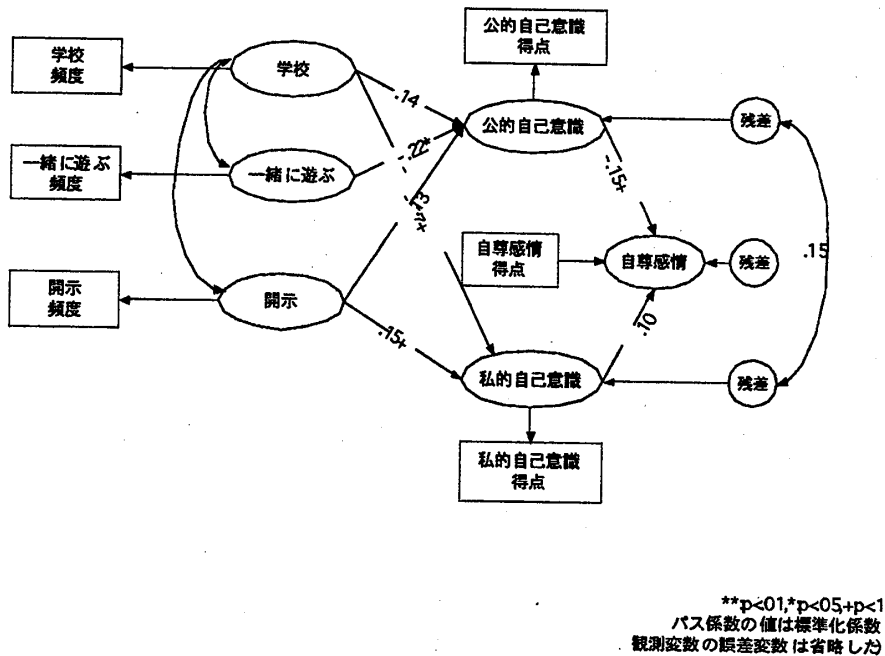


Figure 3 グループ行動から自己意識・自尊感情の間のパス図

(4) 否定的、および (5) 肯定的ライフイベントを投入したモデルでは十分な適合度は得られなかった(RMSEA=.29~.33)。またライフイベントから友人関係に対する態度や友人行動への間接的な影響を想定したモデルでも十分な適合度は得られなかった。

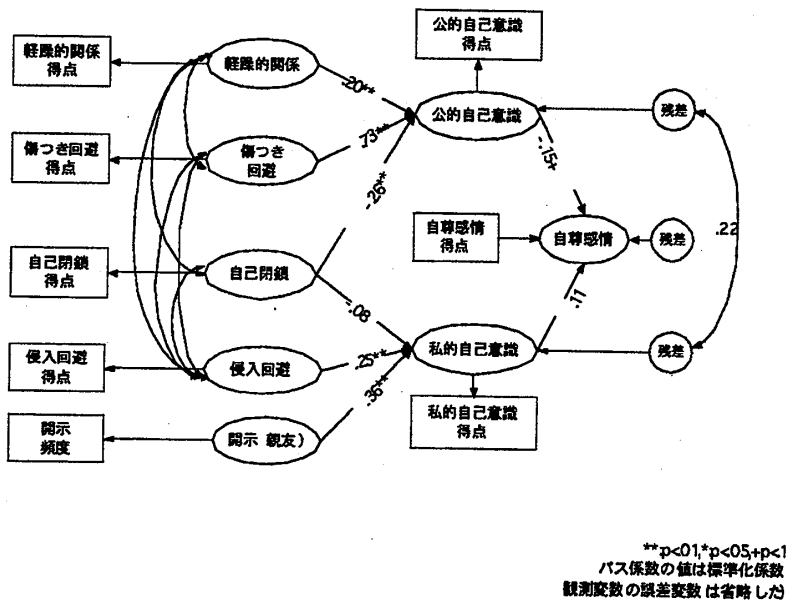


Figure 4 友人関係への態度から自己意識・自尊感情の間のパス図

以上のことから次のように考えられる。ライフイベントについては、直接、間接的にも自己意識の発達には線形的な影響力は持たないことが明らかとなった。榎本(2002)は、個人が生育歴について物語的な文脈をもって解釈したものを「自己物語」と呼び、そうした自己物語の集大成がアイデンティティであるとしている。すなわち、具体的な経験が直接に自己の発達を促すのではなく、生育歴をいったん解釈しなおす過程を通して自己が構成されるために、直接的な経験であるライフイベントが自己意識を規定するモデルでは適合しなかったものと考えられる。このことはまた、否定的ライフイベントの有無のみを問題にしてきた青年期平穩説の限界でもあるとも言えよう。

モデル(1)については、次のように考えることができる。まず「傷つけられることの回避」から公的自己意識へのパスが.74と強い影響力が見いだされた。公的自己意識が評価懸念によって強く規定されることを示している。しかし相対的には小さいながら「自己閉鎖」から公的自己意識への負のパスも有意となった。すなわち友人関係から退却せず関係を維持することで、他者の視点取得が促進され、公的自己意識が高められることを示唆している。一方、私的自己意識については、友人関係に対する態度の影響は全体に小さいものの、「自己閉鎖」からは有意な負のパス、「侵入回避」からは有意な正のパスが見られた。すなわち、現代の青年が、相手の世界に踏み込まないように距離を取った関係を維持しながら、他者とは切り離れた自己の世界を形成しようとしている可能性が示唆される。

友人行動(親友評定)を投入したモデル(2)では、「開示」から私的自己意識へのやや強いパスが見られた。すなわち、行動面においては、内面的な話題を相互に開示しあうことが、私的自己意識を高めると言える。このことはモデル(1)で示された、侵入回避からの正の影響関係(相手に侵入してしまわぬよう距離を取ったつきあい方をすると、矛盾した結果となった)と、矛盾した結果となった。

モデル(1)(2)での結果を受けて、友人関係への態度に親友行動での「開示」を加えたモデル(Figure 4)について検討した。モデル全体の適合度はRMSEA=.08(PCLOSE=.16)でほぼ適合していた。「侵入回避」からのパスは.252(標準誤差 .140)、「開示」からパスは.358(標準誤差.216)であり、信頼区間はそれぞれ「侵入回避」で-0.022~.526、「開示」では-.065~.781となり、両者の信頼区間は重複するため、二つのパス係数の間に有意な差は認められない。すなわち、相手に侵入しないよう気をつかうことと、内面的な自己を開示する行動との両者が同程度に内省の形成に関与していると推定できる。これは、内面的な自分を開示しつつも、他方で相手に侵入しないよう距離を取ろうとすることによる葛藤が、自分自身のあり方についての内省を促す可能性を示唆している。

なお、当初の予想に反して、自己意識特性から自尊感情へのパスはいずれも小さく、また両者間の単純相関も無相関に近かった(自尊感情 対 公的自己意識 $r=-.124$, 自尊感情 対 私的自己意識 $r=.066$ いずれも n.s.)。質問紙形式による自尊感情の測定は社会的望ま

しさや自己呈示の影響を受けやすく(潮村・村上・小林,2003),また今回用いられた Rosenberg による自尊感情尺度は,日本文化における自尊感情を十分反映していない(田中・上地・市村,2003)という問題点が指摘されている。そうしたことが,自己への注意の向きやすさと評価感情の関連を弱めた可能性は否定できないが,この点については,今後の検討課題となるであろう。

なお本研究では横断的調査によって,友人関係やライフイベントと自己の発達について推定を行った。しかし,今後は縦断的な調査を積み重ねることで,発達の経緯をより明確に記述することが必要と考えられる。

注

- 1 Rosenberg(1965)のオリジナルの尺度では「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」(I wish I could have more respect for myself.)という項目が含まれるが,山本・松井・山成(1982)では,この項目は除外されて合成得点化されていた。またこれに代わり「自分に自信がある」が使用されていた。この代替項目を含めた10項目での一次元性は岡田(1987)において確認されており,従来この10項目で全体的自尊感情を測定することが可能と考えられてきた。なお,上記の除外項目の異質性については,谷(2001);田中・上地・市村,(2003)などでも実証的に示されている。
- 2 本研究のデータはランダムな欠損値を含むため,完全情報ML(FIML)推定が用いられた。この場合解析に用いられたソフトウェアではGFI,AGFIなどの適合度指標は出力されない。

引用文献

- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- 榎本博明 2002 <ほんとうの自分>のつくり方:自己物語の心理学 講談社
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 笠原嘉 1976 今日の青年期精神病理像 青年の精神病理 1 弘文堂 Pp.3-27.
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- クレッチマー, E. 1958 新海安彦(訳) 精神療法 岩崎書店(Kretschmer, E.1948 *Psychotherapeutische Studien*. Georg Thieme Verlag, Stuttgart.)
- 栗原彬 1996 やさしさの存在証明-若者と制度のインターフェイス-増補新版 新曜社
- 松井豊 1990 友人関係の機能「青年期における友人関係」(斎藤耕二・菊池章夫編著 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp.283-296)
- 村瀬孝雄・村瀬嘉代子 1973 事例研究による平均的青年の人格発達過程 精神衛生研究 22,11-25 国立精神衛生研究所
- 西平直喜 1973 青年心理学 塚田毅(編) 現代心理学叢書7 共立出版
- 西平直喜 1990 成人になること 生育史心理学から 東京大学出版会
- Offer, D., & Offer, J. 1975 *From Teenage to Young Manhood :a psychological study*. Basic Books: New York.
- 岡田努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116-121.

- 岡田努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係
発達心理学研究, 4, 162-170.
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田努 1999a 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研
究, 47, 442-449.
- 岡田努 1999b 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, 9,
21-31.
- 岡田努 2002a 友人関係の現代の特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達の研究 金沢
大学文学部論集, 22, 1-38.
- 岡田努 2002b 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研
究, 10, 69-84
- 大平健 1995 やさしさの精神病理 岩波書店
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 千石保 1991 “まじめ”の崩壊:平成日本の若者たち サイマル出版会
- 総務青少年対策本部 1999 第6回世界青年意識調査
- 清水将之・頼藤和寛 1976 青春期危機について(その1) 文献的展望と予備的考察 精神医学, 8,
145-152.
- 潮村公弘・村上史朗・小林知博 2003 潜在的社会的認知研究の進展: IAT (Implicit Association Test)へ
の招待, 信州大学人文学部人文科学論集, 37, 65-84.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度 self-consciousness scale 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 田中道弘・上地勝・市村國夫 2003 Rosenbergの自尊心尺度項目の再検討, 茨城大学教育学部紀要(教
育科学), 52, 115-126.
- 谷冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造: 多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成, 教育心理学
研究, 49, 265-273.
- 鐘幹八郎 2002 アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版
- 東京都生活文化局 1985 大都市青少年の人間関係に関する調査: 対人関係の希薄化との関連から見た
分析
- 遠矢幸子 1996 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇編 対人行動学シリーズ3 親密な対人
関係の科学 誠信書房 第4章 Pp.90-116
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

付記

- 本研究の調査は平成 13-16 年度科学研究費補助金(基盤 C(2)一般 課題番号 13610123「青年期危
機が人格的発達に及ぼす効果に関する研究」)による研究の一部として実施されたものである。
- 本研究では次のソフトウェアを用いて統計処理を行った。
SPSS 12 for windows, AMOS5 (いずれもエス・ピー・エス・エス社)